

内村と聖書:「加拉太書の研究」にみる抵抗の釈義

For twenty centuries God has been perfecting Bushido
with this very moment in view.
Christianity grafted upon Bushido will yet save the world.¹

浅 野 淳 博

導入

「このモメント」が到来し、キリスト教がその聖典とともに日本を再訪した。200年以上も抵抗し続けてきた西洋との遭遇である。歴史的な詳細は別として、この遭遇を体験した日本人にとってキリスト教という宗教は、洪水のようにこの小国に押し寄せる革新的な技術——良くも悪くも——の背景にある「魂」として映った。したがって、聖書受容という物語は西洋文明と不可分の関係にある。この遭遇が与えた衝撃の大きさは計り知れず、日本人のアイデンティティは大きく揺さぶられた²。しかし、西洋文明の「魂」と目された聖書の言葉を受け入れた日本人は、さらに大きなアイデンティティの危機を迎えた。この時以来、日本人キリスト者は1つの重要な問題に直面し続けることとなった。すなわち、「いかにしてキリスト者でありながら日本人たるか」という問題である。いま誕生したばかりの弱小な宗教共同体は存続を欲した。そのためこの共同体の聖書受容には、周りの世界——キリスト教伝統と日本伝統——を評価し再定義する必要が生じた。キリスト者がこの世において居場所を見出すためには、2つの伝統の融合は不可避的であった。無教会の創始者である内村鑑三

1 内村鑑三著『*Bushido and Christianity*』『聖書之研究』186(1916年1月)、内村鑑三著『内村鑑三全集』22巻所収、岩波書店、1982年、161-62頁。

2 Donald H. Shively, 'The Japanization of the Middle Meiji', in D.H. Shively (ed.), *Tradition and Modernization in Japanese Culture* (Princeton: Princeton University Press, 1971), p. 79.

は、この必要のために「Christianity grafted upon Bushido」なる土着化を迫られた。これは「日本人キリスト者」なる融合的アイデンティティが、彼にとって尊厳を獲得するために有用と思われたからであろう。創始期にあたる他のキリスト教共同体もアイデンティティを保全するために苦心したのだが、内村と彼の無教会はその特殊な社会的位置ゆえに苦心も大きかった。

本論文では、まず日本のキリスト教との遭遇と内村による無教会の創設に関わる歴史を概観し、内村による聖書受容の動機を明らかにする³。動機が明らかになったところで、内村が聖書を読む場合の特徴的な3つの適用点——すなわち、周縁者の正当化、愛国心の再考、キリスト教の再定義——に注意を向けながら彼の文書を考察する。彼が遺した著書、論文、日記等はすべて『内村鑑三全集』に所収されているが⁴、その中でも、パウロのガラテヤ書簡に関する研究論文と、内村がパウロとしばしば対比する預言者たちに関する論文を分析する。これらの論文に焦点を置く理由は、内村自身がガラテヤ書簡に対して特別な親近感を抱いており、彼の無教会という共同体形成の体験をパウロの宣教活動になぞらえているからである。

I. キリスト教の伝播と無教会の発生

A. 日本のキリスト教との遭遇

キリスト教が日本へもたらされたのは内村の時代から約300年ほど遡る。イエズス会のフランシスコ・ザビエルが日本に到達したのは1549年のことである。彼の宣教は少なからぬ戦国武将の関心を引いたが、その多くはポルトガルとの交易という経済的動機に動かされていたことであろう。それにしても、カトリック教会の宣教が始まって1世紀ほどのあいだに、キリスト者の人口は300,000人へ

3 内村の無教会発生に関する歴史的詳細に関しては A. Asano, *Community-Identity Construction in Galatians* (JSNTS 285; London & New York: T. & T. Clark Continuum, 2005), 2章; Carlo Caldarola, *Christianity: The Japanese Way* (Leiden: E.J. Brill, 1979), 2章を参照。

4 内村鑑三著『内村鑑三全集』全41巻、岩波書店、1980-2001年。

と膨れあがった⁵。しかし徳川幕府が日本全土を制圧すると、第三代将軍家光は組織的で全域的なキリシタン迫害を始めた。このキリシタン制圧は、伝統的宗教の純粋性を保全し、道徳的秩序を保証し、西洋の拡大主義から国土を保守するという政策の一環であるとされた。この迫害は徹底的であり、棄教しない者たちは処刑されるか（殉教者40,000人を数える）、あるいは信仰と生命を守るために地下に潜伏した。西洋から到来した宗教に対する恐れと偏見は人民の心に刻み込まれた⁷。反キリスト教的政策の一環として1639年に家光は鎖国を実施し、それ以降200年のあいだ日本は西洋諸国に対してほぼ門戸を閉じた。「パックス・トクガワ」と称されるこの時代に、幕府は人民の組織的な登録を行ったが、これには潜伏キリシタンを搜索し、人民に「邪悪な宗教」への恐れを持続させる目的もあった。

パックス・トクガワは1853年のペリー来航によって敢えなく幕を閉じた。ペリー来航は鎖国を廃止し日本中世の門戸を海外に開く外圧の象徴的出来事であった。日本には西洋列強に抵抗してその植民地となるか、かえって日本の西洋化によってアジアにおける地位を確立し西洋諸国と並ぶ威力を見せつけるか、という選択を迫られた。結局日本は立憲君主国家として明治時代を迎え、西洋化を進めることとなった⁸。西洋技術は日本の近代化に欠かせない要素であり、国を挙げてこれを取り入れた。これとともに、長らく恐れられ抵抗されてきたキリスト教も流入したが、日本人の大半はこの宗教に対する偏見を持続させた⁹。明治政

5 C.R. Boxer, *The Christian Century in Japan, 1549~1650* (Berkeley & L.A.: University of California Press, 1967), pp. 321, 360.

6 「潜伏キリシタン」の歴史に関しては、Ann H. Harrington, *Japan's Hidden Christians* (Chicago: Loyola University Press, 1993); Christal Whelan, *The Beginning of Heaven and Earth: The Sacred Book of Japan's Hidden Christians* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1996) を参照。

7 George Ellison, *Deus Destroyed: The Image of Christianity in Early Modern Japan* (Massachusetts: Harvard University Press, 1973), pp. 178-79.

8 近代日本の確立に関しては、Ann Waswo, *Modern Japanese Society* (Oxford: Oxford University Press, 1996) を参照。

9 明治初期においても継続したキリスト教迫害に関する報告については、塩野和夫訳・解説『禁教国日本の報道——「ヘラルド」誌(1825-73年)より——』雄松堂出版、2007年を参照。キリスト教に対する偏見に関しては、森岡清美著『日本の近代社会とキリスト教』評論

府は当初無批判な西洋化を進めたが、この反動は大きく、振り子はあからさまな国粹主義へと振れた。1873年、西洋諸国は日本に対してすべての反キリスト教的政策を廃止するように求めた。しかし日本は、天皇を国主とし神道を国家宗教として認める帝国憲法（1889年）と教育勅語（1890年）を制定した。「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」と定める帝国憲法28条は、キリスト教の危険性を前提としており、結果的にキリスト教許容に制限を加える結果となった。高まる帝国主義の中で、キリスト者は2人の「主」———万世一系の天皇と来るべき万軍の主———のあいだに立たされた。

B. 無教会の発生

内村の弟子である亀井俊介は、西洋と遭遇した日本のアイデンティティ危機に際した当惑を以下のように述べている。「この動揺はとりもなおさず明治精神の動揺でもあったと思うからである。明治精神も、全体として、西洋と日本との間で揺れ続けたのだ。」そして亀井は続ける。「ただ内村は、それを他の誰よりも激しく、大きな振幅をもってなした。彼がそのような揺れたのは、彼が時代の理想を最も強く持ち、その結果、時代の現実に最も強く衝突したからであろう¹⁰。」亀井は内村が大きく振幅した理由をその理想主義に置くが、内村が抱く理想とはどのようなものであっただろうか。

明治政府のもとで禄を失った多くの侍子弟と同様に、内村は新たな社会で道を切り開くために西洋教育を熱心に取り入れた。札幌農学校に入学した内村は魚類学を専攻するが、ウィリアム・クラークに感化された他学生たちの強い勧めのもとで、1877年12月11日、「『耶蘇教』ノ門ニ入レリ¹¹。」彼の改宗は、少なくとも部分的には、西洋文明に対する初期的な憧れに起因している。内村はそのナイーブな理想主義をもって渡米するが（1885-88年）、「キリスト教国家ア

社、1970年、215-16頁を参照。

10 亀井俊介著『内村鑑三：明治精神の道標』中公新書、1977年、221-22頁。

11 内村鑑三著『余は如何にして基督信徒と成りし乎』岩波文庫、1938年、26頁。英語版（18頁）では改宗の日付が12月1日となっている。

メリカ」において目の当たりにした道徳的退廃によって、西洋文明に対する憧れに水をさされる。これと前後して、教派の壁を越えたキリスト者の集まりを画策する内村と教派宣教師のあいだには対立が生じていた。これを機に内村は、西洋的な要素の介在しないキリスト教信仰の表現方法を模索するようになる¹²。帰国時の日本は、帝国憲法と教育勅語の発布を期にして、いよいよ帝国主義的な高まりを見せていた。1890年、教育勅語制定の記念行事において、内村は一高不敬事件を引き起こし、国賊として揶揄され非難を浴びることとなる¹³。愛国主義者を自認する内村にとって、この不敬事件は「愛国」の真に意味するところを再考するきっかけとなった¹⁴。

恥辱と周縁化の末、内村は教会に助けを求めるが、宣教師たちの教派主義を引き継いだ教派教会を厳しく批判してきた内村に対して、大半の教会は助けの手を述べることに躊躇した。内村によると、教会は不敬罪の嫌疑をかけられることを懸念して、彼から距離をおいたのである¹⁵。内村はこの疎外感に起因する悲しみと葛藤を彼の著書の内に記している。「余は無教会となりたり、人の手にて造られし教会今は余は有するなし、余を慰むる讃美の声なし、余の為に祝福を祈る牧師なし、然らば余は神を礼拝し神に近づく為の礼拝堂を有せざる乎¹⁶。」内村は、西洋教会の分派主義に直面し、メディアによる国賊扱いによって周縁化を体験し、教会の拒絶に失望した。そして内村は、これらの体験への応答として、1900年に「無教会」なる共同体を設立することになる。それ以来無教会は、

12 内村は初期の西洋への憧れを告白しており、米国を「乳と蜜の流れる土地」と考えていたと述べる。このような感情は、欧化政策初期における知識人が共有するものであった。Erwin Bälzt, *Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan, Tagebücher, Briefe, Berichte herausgegeben von Toku Bälzt* (Stuttgart: J. Engelhorn's Nachf, 1931), p. 89; Van C. Gessel, *Three Modern Novelists: Soseki, Tanizaki, Kawabata*, (Kondansha International, 1993), p. 86を参照。内村はこの初期のナイーヴな視点をのちに破棄し、「一事を余は将来けつして為さないであろう、——余は基督教をヨーロッパとアメリカの宗教であることによってけつして弁護しないであろう」と述べている。内村『余は如何にして』、124頁。学生の集会に介入しようとする宣教師への憤懣に関しては、内村『余は如何にして』、4章を参照。

13 内村「Letter to Bell' (March 6, 1891)」、『全集』36巻所収、331-32頁。

14 内村「今日の困難」、『東京独立雑誌』（1898年7月）、『全集』6巻所収、64頁。

15 内村「Letter to Bell' (March 6, 1891)」、『全集』36巻所収、334頁。

16 内村鑑三著『基督信徒の慰』、『全集』2巻所収、26頁（初刊は1893年）。

反体制的（半教派的）で反儀礼的であると同時に土着の信仰表現を追求し¹⁷、本来のエクレシアへの回帰を求めることを強調する、特徴的なキリスト教共同体として存続している¹⁸。

この歴史的概説を結ぶにあたって、内村の聖書受容の動機に触れよう。内村は聖書が彼自身の信仰、その共同体、また日本国家を導く生ける神の意志を啓示する聖典であるという確信を抱いていたが、それと同時に、彼と彼の無教会の体験に近く寄り添う類例を提示すべき資料として聖書を読んだ。すなわち聖書は、新生したばかりで周縁に迫いやられた共同体の存在意義を確立し保証するという目的にとって重要な資料となったのである。以下の項においては、内村がいかに聖書を読み、いかに彼と無教会の体験に対する聖書の類例を見出したかを考察する。無教会は教派教会から距離をおいていたが、両者ともに反キリスト教的社会において周縁化体験を強いられていた。したがって、内村の聖書受容のうちには、日本一般がいかにキリスト教と向き合ったかをも垣間見ることができよう。

II. 内村と聖書

A. ガラテヤ書簡への感心

指導者たちの著作群を編纂する傾向が無教会にはあり、その結果としてこれらの指導者の複数巻からなる作品全集が発刊されている。1つの理由としては、指導者の多くが非常に高い教育を受けていた知識層に属していたことが挙げられよう¹⁹。今1つの理由としては、教派あるいは体制的なアイデンティティを持

17 カルダローラが調査を行った段階では、信徒数が約35,000であった。Caldarola, *Christianity*, pp. 67-68.

18 スイス神学者のエミール・ブルナーが内村と無教会をヨーロッパに紹介し、本来のエクレシアとは異なるものを建て上げる教会の過ちを指摘した点を称賛している。Emil Brunner, *Das Misverständnis der Kirche* (Zürich: Zwingli-Verlag, 1951), とくに10章: 'Die Christugemeinde und die Kirche der Geschichte'. また E. Brunner, 'Die christliche Nicht-Kirche-Bewegung in Japan: Gottlob Schrenk, dem Mann der Mission zum 80 Geburtstag', *Evangelische Theologie* 4 (1959), pp. 147-55をも参照。

19 Brunner, *Das Misverständnis der Kirche*, p. 154.

ちえない共同体がその連帯感を高めて維持するために、敬意が寄せられる指導者の著作全集を発刊し、共同体アイデンティティの媒介としているとも考えられる²⁰。このようにして内村の著作は無教会構成員の霊的遺産として保存され、結果的には日本のキリスト教にとっての遺産となった。彼の著作集のうち、我々の関心は内村のガラテヤ書研究にある。また預言者イザヤとエレミヤの研究にも注目する。

ガラテヤ書研究の序説において、内村はこの書簡に対する特別な親近感を以下のように表している。「ルーテルは加拉太書を称して『是れ我が書なり』と言うた。私も亦彼に倣うて言う事が出来る…然し乍ら私が加拉太書に負ふ所はルーテル以上であろうと思ふ²¹。」ルターは彼自身の教派の教皇になることによってこの書簡の教えを実践することにおいて失敗した、と内村は評し、自分自身は本来のエクレシアを体現する無教会の精神を保つことによってこの書簡の教えを完成させたと説明する。内村は続けて言う。「若し法王や監督が私に向ひ『汝の無教会主義の聖書の基礎は何処に在る乎』と問ふならば私は断然答へて日ふ『パウロの加拉太書に於いて在る』と。…聖書に此書が在る間は反教會的精神は減びず…²²。」したがって内村にとって、ガラテヤ書簡は彼のキリスト者としての存在の基礎をなし、彼が創設した信仰共同体の存在意義を保証するものである。

内村のガラテヤ書研究において特徴的なことは、パウロの生涯を預言者イザヤとエレミヤとになぞらえる点である²³。霊的改革を目指した孤独な預言者の姿が、ガラテヤ書簡が描くパウロの生涯と重なったのであろう。そしてこれらの預言者と使徒の生涯は、内村の大義に対して正当性を与えているのである²⁴。じつに内

20 Asano, *Community-Identity Construction in Galatians*, pp. 209-11. Caldarola, *Christianity*, p. 127をも参照。

21 内村鑑三著『加拉太書の精神』、向山堂、1926年、『全集』29巻所収、458頁。

22 内村『加拉太書』、『全集』29巻所収、458頁。

23 例えば預言者イザヤの啓示体験はダマスコ途上におけるパウロの改宗体験と較べられる。内村「イザヤ書の研究」、『全集』31巻所収、17-18頁。「イザヤ書の研究」と「エレミヤ伝研究」はそれぞれ、『聖書之研究』330-35巻（1928年1-6月）、『全集』31巻所収、7-73頁と『聖書之研究』306-12巻（1926年1-7月）、『全集』29巻所収、353-403頁。

24 海老沢有道・大内三郎著『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1970年、282-83頁。

村は、ガラテヤ書簡と同様の評価をエレミヤ書に与え、以下のように言う「実に耶利米巫記が聖書の内に存する間は無教会主義は基督信者の間より絶えない²⁵。」内村は聖書全体においてはローマ書簡の神学的重要性を認めながらも²⁶、彼と無教会のためにはガラテヤ書簡を珍重する。したがってここでは、内村のガラテヤ書研究に注目しよう。

B. 内村によるガラテヤ書簡釈義

1. 孤独な預言者の正当性

ガラテヤ書簡の釈義を始めるにあたって、内村はパウロが独自の使徒職を主張する最初の節に注目する。内村はこの節を「信仰の砦」と呼び、パウロが孤独な預言者の声となる招きであると考え。この節を解釈するに際し、内村はパウロが反对者と対立した痛ましい体験を、内村の信仰の正統性を疑う教派教会や宣教師たちとの対立とを比較する²⁷。内村は自らの体験を「この悪の世」（ガラ1.4）の兆しと捉え、彼の神に対する忠誠心が異端的で非常識と非難されるのは、彼が悪の世に置かれているからであると述べる²⁸。他所においても、内村は体制側から異端扱いされたイエス、パウロ、ルターと自らを較べたうえで、以下のように「異端」を定義する。

真理、人によらずして独り立つときに、世は是を異端と称し、帝王の庇護するところとなりて、人、是を聖教と名づく。邪教の世にありては、事物ごとくその名を転倒す。幸いなるは、この世にありて、異端のゆえをもって「正教」の忌むるところとなることなり²⁹。

25 内村「エレミヤ伝研究」、『全集』29巻所収、354頁。

26 内村「イザヤ書の研究」、『全集』31巻所収、7頁。

27 内村「加拉太書の研究」、『全集』29巻所収、18頁。聖公会、長老派、会衆派による内村批判の経緯に関しては、内村『全集』3巻、41頁;36巻303、334頁;政池仁著『内村鑑三伝』教文館、1970年、160-61頁。

28 内村「加拉太書の研究」、『全集』29巻所収、24頁。

29 内村「異端」、『聖書之研究』102巻、『全集』16巻所収、73頁。「正教と異端」、『聖書之研究』103/104巻、『全集』16巻所収、82頁をも参照

預言者イザヤの研究においても、内村はガラテヤ書1章1節に言及する。ここで内村は、神的な預言者の召命が人的な妨害に遭遇することを述べている。この神적召命という文脈の中で、内村は教派教師たちを神ではなく宣教師や教派協議によって召命された者という烙印を押す（負のアイデンティティ形成としての烙印化）。内村の働きを正当化する「委員会」の欠如は、内村にとって問題とはならない。なぜならイザヤ書63章1-6節が記すように、神はその働きを独自に遂行するからである。イエスは一人で十字架にかかり、パウロもまた一人で異邦人宣教へと向かった³⁰。神の意志を遂行するために、彼らはみな孤独であった。その孤独を預言者イザヤは以下のように述べている。「わたしは見回したが、助ける者はなく、驚くほど、支える者はいなかった」（イザ63.5）³¹。また内村はガラテヤ書1章1節を念頭におきながら、エレミヤが王、貴族、祭司、政治家、全民族に逆らって神の預言者となる召しに応答したことに触れ（エレ1.15-2.13）、そこでエレミヤはいまだ若輩で「頼るべき教会を持たなかった³²」と述べている。ここで内村は、自分自身の孤独な決断をエレミヤの預言者としての召命へと投影している。内村が描くエレミヤの状況は、上述した彼自身の状況に酷似しているからである。すなわち、「余は無教会となりたり、人の手にて造られし教会今は余は有するなし、余を慰むる讃美の声なし、余の為に祝福を祈る牧師なし…³³。」したがって内村は、パウロ、イザヤ、エレミヤと自らを比較しながら、彼自身の周縁化体験を神による確かな召命の証しとして正当化しているのである。

預言者の召命という主題に留まりつつ、内村は預言者にとって「荒野体験」が重要であることを指摘する（ガラ1.15-17）。そしてこの荒野体験においてこそ、モーセ、エリヤ、洗礼者ヨハネ、イエスまたパウロのような預言者が、神から啓示を受けたか、あるいは神の教えを深く内面化したと説明する。パウロにとって、テトスに割礼を施そうとする反対者の圧力に対して福音の真実のために抵抗する力は、荒野における成長体験から得ることができた。そして内村は、彼

30 内村「イザヤ書の研究」、『全集』31巻所収、58-60頁。

31 内村「単独の勢力」、『聖書之研究』331巻（1928年2月）、『全集』31巻所収、104-05頁。

32 内村「エレミヤ伝研究」、『全集』29巻所収、370-71頁。

33 内村『基督信徒の慰』、『全集』2巻所収、36頁。

自身にとっての荒野体験が何であるかと自問する。そして、「無情無慈悲の砂漠である。冷酷なる今の社会、然り宗教界、是れ砂漠ならずして何ぞである。そして人の無情が我等を其所に逐ひやる時に我等は其所に神の御声を聞くのである³⁴」と答える。内村は、反キリスト教的社會風潮と教会からの疎外感という荒野体験において、福音書真理を確信したと考える。

ガラテヤ書3章1-5節において、パウロはガラテヤ信徒に対して福音の真理に関する厳しい警告を発する。内村はこの警告を、靈的に墮落したイスラエルに対して警告を送るエレミヤと較べる（エレ2.11-13）³⁵。ガラテヤ書簡において内村がパウロの預言者としての役割を強調する場合、これは内村自身の預言者としての役割に言及しているだけではなく、無教会信徒が彼らに与えられた預言者としての役割を受け止めるよう促しているのである。信徒自身が当時の社会にあって預言者の声となるようにという奨励は、エレミヤ書5章の解釈において表現されている。内村はここで、「然しユダヤには少なくともエレミヤが居つた。我国に於ては彼も居らないのである。義人一人もあるなしとてエホバの怒を以て民を責めたエレミヤを持つたユダヤは其点に於て我国に優るいくばく^{いくばく}幾許であるか知れない。³⁶」と述べている。靈的墮落を経験しているユダは少なくとも正義を求め警告の声を上げる預言者を有していたが、当時の日本にはその歩むべき道を定める声が欠けており、読者こそがその声となるべきであることを内村は説いている。

エルサレム教会とそのユダヤ的宣教に抵抗したパウロの姿は、今日のパウロ研究者に対して、キリスト教アイデンティティを画一的に捉えるのではなく、かえって初期教会の形成過程における複雑さを看過しないよう警告を与えている。内村は、パウロがエルサレムの指導者たちに対してでさえ躊躇せずに抵抗したその姿勢を称えている³⁷。外的圧力に負けずに神的啓示と福音の真实性を確

34 内村「加拉太書の研究」、『全集』29卷所収、30-36頁、とくに35頁。

35 内村「加拉太書の研究」、『全集』29卷所収、48頁。

36 内村「エレミヤ伝研究」、『全集』29卷所収、391頁。

37 内村「加拉太書の研究」、『全集』29卷所収、15-16頁。

信した孤高の預言者としてのパウロの姿は、内村と無教会に対して、教会と国家の両方から疎外される経験こそが正統性の証しであることを教えている。じつに内村は、パウロが受けている「イエスの焼き印」（ガラ6.17）を2コリント書簡11章23-25にある様々な艱難の結果であると理解するが、同時に彼が受けた艱難と周縁化の記憶を彼自身にとっての「イエスの焼き印」と捉える³⁸。内村と無教会にとって、ガラテヤ書簡は地位逆転による正統化の前例として重要な聖典資料なのである。

2. 愛国者の嘆き

上述のとおり、内村はその日本人としてのアイデンティティとキリスト者としての良心とのあいだで葛藤を体験し、それが愛国心という概念の再定義へとつながった。とくに2つの事件が内村をして、必要でありながら厄介な愛国心という概念を再考させるに至った。1つは、不敬事件をとおして内村が味わった著しい屈辱体験である。そしてもう1つは、日清戦争（1894-95年）の結果である。この結果をとおして、内村は無批判的な愛国心は彼の国家に対する愛を裏切ると確信するに至った。当初内村は、アジア地域において正義を保証するために、この戦争を支持していた³⁹。しかしこの戦争が結局無慈悲な拡大主義に終始したことを知った内村は、彼の支持表明を撤回し、日本の軍国主義を痛烈に批判し、またその拡大主義を支持することになった教会をも非難した⁴⁰。この問題を解決するために、内村は再び聖書の預言者に目を向け、彼らの内に真の愛国心を見出した。

内村は『聖書之研究』におけるエレミヤ研究シリーズの直前に、あたかもこの研究シリーズの緒言かのような愛国心に関する論文を記している。

38 内村「加拉太書の研究」、『全集』29巻所収、17、19頁。

39 内村「Justification of the Korean War」、『The Japan Weekly Mail』（Aug., 1894）、『全集』3巻所収、39頁。

40 松沢弘陽著『内村鑑三』中央公論社、1971年、49-50頁。内村はこの時の失望をその友バルに明かして以下のように言う。「A righteous war has changed into a piratic war somewhat, and a prophet who wrote its justification is now in shame」内村「Letter to Bell」（May 22, 1895）、『全集』11巻所収、296-97頁。

私に愛する二個のJがある、其一はイエス（Jesus）であつて、其他の者は日本（Japan）であると。イエスと日本とを較べて見て、私は孰れをより多く愛するか、私には解らない。其内の一を欠けば私には生きて居る甲斐がなくなる。私の一生は二者に仕へんとの熱心に励まれて今日に至つた者である。…日本は決してイエスが私を愛して呉れたやうに愛して呉れなかつた。それに係はらず私は今尚日本を愛する。…私の愛国心は軍国主義を以て現はれない。…私は日本を正義に於て世界第一の国と成さんと欲する⁴¹。

内村の理解によるならば、神による預言者への召命は、しばしば愛国者となる召命であり、命を犠牲にしてでも、国家の不正に対して「否」と言える愛国者への召命である。宗教者としてのアイデンティティと国民としてのアイデンティティのあいだでの和解を求めた内村にとって、預言者としての行動と愛国者としての行動は密接に結びついていた。ガラテヤ書研究においては愛国心に関して詳しい考察をしていないが、パウロによる以下の告白を模範的な愛国者の姿勢と捉えている。すなわち、「わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となっても良いとさえ思っています」（ロマ9.3-4）⁴²。エレミヤ書9章1節について、「嗚呼、我わが首を水となし我目を涙の泉となす事を得んものを」と述べ、読者に対して「是れ大予言者エレミヤの悲嘆の声である。愛国者の慟哭である。世界の何処にまた誰か斯くも深刻なる嘆きを以て自己の国の為めに泣いた者があるか」と訴える⁴³。内村は不正を続ける国家に対する憂国の思いを、エレミヤの預言者としての嘆きと結びつける。そしてエレミヤの愛国的献身に依拠した警告（エレ9.4-9）に同調し、内村は国家に対して手厳しい非難を向ける⁴⁴。

41 内村「愛国心に就いて」、『聖書之研究』306巻(1926年1月)、『全集』29巻所収、351-52頁。

42 内村「羅馬書の研究」、『全集』26巻所収、333-35頁。

43 内村「エレミヤ伝研究」、『全集』29巻所収、397頁。

44 内村「エレミヤ伝研究」、『全集』29巻所収、399頁。

しかし内村の愛国心に関する再考は、イザヤ書に負うところが大きい。内村は、旧約聖書の預言者を読むまでは祖国を愛するこのと意味を知らなかった、と告白し、読者が預言書を読んで真の愛国心を学ぶように促す。内村はイザヤ書を初めとする預言書を読み、「(愛国心は) キリストの僕として私が懐くべき心であつて、又行ふべき道であることを知ったのである」という認識に至る⁴⁵。内村はイザヤ書2章14節から愛国的預言者に共通な特徴を導き出す。すなわち、祖国の理想を掲げ、祖国に対する神的幻を抱き、その幻の達成に努めることである。イザヤが語るユダとエルサレムに対する幻とは、すべての国々が集まりその民をとおして主の教えを聞くことである。内村はイザヤの幻と日本の帝國的愛国者とを比較する。そして、後者が西洋をとおして軍勢力を高めて破壊的国家を作りあげる様子を、表面的で未熟な愛国心として嘆く。

聖書の内に愛国心の模範を見出し、愛国心から軍国主義を排除することによって、内村はイザヤが抱いた幻を祖国に対して抱く。すなわち、日本的キリスト教が世界の救済という大義のために仕える、という幻である。しかしそのために、内村にはもう1つの過程をふまなければならなかった。それは、西洋的な要素を排除した日本的キリスト教の定義づけである。そこで内村は、「日本人と基督教」という論文において、以下のように述べている。

キリストが日本に臨み給ひしは外国人が我国に攻来つたではありません。「彼れ己の国に來りしに其民之を接けざりき」とあるが如くに、キリストは日本に來りて己が国に來り給うたのであります。日本人は西洋人よりも、殊に英米人よりも、より善く、より深く彼を解し奉るの資格を具へられたのであります。…基督教は日本人を待つて其完全に達するのであると思ひます⁴⁶。

これによって内村は、基督教の再定義を試みている。それは一方では、否定的

45 内村「イザヤ書の研究」、『全集』31卷所収、44-45頁。

46 内村「日本人と基督教」、『聖書之研究』301卷(1925年8月)、『全集』29卷所収、277頁。

な西洋的要素の排除であり、もう一方では肯定的な土着化である。この2つの方向性を、内村の聖書受容に関する最後の項で確認することにしよう。

3. 西洋の排除と土着化による日本的キリスト教

キリスト教が西洋文明の思想（魂）である限り、キリスト教を恐れて抵抗する長い歴史を持つ社会に住む日本人キリスト者はそのアイデンティティの歪みに悩まされることになる。この問題のために、ガラテヤ書研究に限らず内村の著作においては、西洋的なキリスト教は真のキリスト教の姿とは異なるものとして扱われる。例えば内村は、体制的なカトリックだけでなく改革派の伝統さえも手厳しく批判して、「I hate Protestant Churches because they are not Protestant enough⁴⁷」と記す。しかしガラテヤ書3章における信仰とトーラーとの関係において、内村の議論は典型的なルターの理解を反映している。そこで内村は、ユダヤ教とキリスト教の断絶を強調し、ルター自身の表現——「トーラーは未信者にとって『死のハンマー⁴⁸』——に近づき、「律法は我等を福音へと追ひやる鞭の如き者である⁴⁹」と述べている。ルターが自分自身の教えを守れなかったと批判しながらも、内村の教えはルターのそれに近似している。それでも内村は、ルターでも西洋伝統でもなく彼自身が、ガラテヤ書簡に見られるパウロによる改革の幻を完成すると考えている⁵⁰。内村にとって西洋的キリスト教は、人間的要素である体制（教派主義）と特定の儀礼へのこだわり（儀礼主義）を排除した本来のエクレシアに到達することができなかったのである。

教派主義と儀礼主義に対する一般的な批判の背景には、上述した内村の体験、すなわち宣教師たちの党派主義と理想とした米国の道徳的退廃への失望がある。しかし、より広い歴史的文脈を看過することはできない。明治初期にプロテスタント教会の宣教が開始されたとき、最初の宣教師たちと日本人キリスト者た

47 内村「カトリックに成らず」、『聖書之研究』333巻(1928年4月)、『全集』31巻所収、134-35頁。

48 Hilton C. Oswald (ed.), *Luther's Works* (vol. 26, trans. Jaroslav Pelikan; St. Louis: Concordia, 1963), p. 39.

49 内村「加拉太書の研究」、『全集』29巻所収、53頁。

50 内村『全集』29巻、458頁。

ちは「基督公会」の実現を議論した。これは西洋の教派主義を排除して一致した共同体の実現を画策するものであった。このような方向性の背景には、初期の宣教における人的また財的資源が乏しく、教派を越えた協力が不可欠であったという事情があった。しかし、教派主義に立つ西洋のキリスト教の長い伝統を無視した基督公会というナイーヴな理想は、とくに長老派と改宗派の意見の相違によってろくも崩れた⁵¹。

内村にとって、ガラテヤ書簡はキリスト教から西洋的要素を排除するための中心となるテキストである。興味深いことに、ガラテヤ書研究の短い序説のうちの多くのスペースを用いて、内村はこのガラテヤ書研究によって読者がアメリカ的キリスト教の影響に抵抗することをねらっていると述べている。アメリカ合衆国の拡大主義を評して、内村は「人は『今後世界を滅す者は米国主義である』と言ふが、然し此強大なる米国主義に打勝つて尚ほ余りある者は、加拉太書に明記されたるパウロの福音である⁵²」と述べる。内村は他所でも、アメリカ的キリスト教を物質的、党派主義的、そして勝利主義的と酷評する⁵³。この序説を内村が著す2年前、すなわち1924年に米国議会は排日移民法を通過させている。この法案の成立に対して非常に批判的であった内村は、ガラテヤ書研究を開始する際に痛烈な非難を込めてその序説を著したのかも知れない⁵⁴。もっともその背後には、以前の理想的キリスト教国家アメリカへの失望が反映されていることであろう⁵⁵。ガラテヤ書研究の本論においては、「異なる福音」（ガラ1.6-7）を宣べる反対者の現代的類例として、党派的で排他的な教派主義と儀礼主義を教えるアメリカ人宣教師が挙げられる。そして内村は、テトスに割礼を強要したエルサレムの「偽兄弟」に対するパウロと同様の結論を、アメリカ的キリスト教に対して下す（ガラ2.1-10）。異邦人への割礼に抵抗するパウロの姿は、バ

51 海老沢・大内『日本キリスト教史』182、190-91頁。

52 内村「加拉太書の精神」、『全集』29巻所収、458-59頁。

53 内村『*The Japanese Christian Intelligencer*』2.5巻(1927年7月)、『全集』30巻所収、368頁；「Quantitative Christianity」、『聖書之研究』191巻(1916年6月)、『全集』22巻所収、368-69頁。

54 内村「Exclusion Again」、『聖書之研究』287巻(1924年6月)、『全集』28巻所収、231-32頁。

55 太田雄三著『内村鑑三——その世界主義と日本主義をめぐって』研究社、1977年、158-59頁。

ブテスマを教派加入条件とする今日の教会に抵抗する内村へ神学的な裏付けを与える⁵⁶。日本の教派教会も、キリスト教の再定義の必要性を強く感じていた。海老沢と大内は、当時の教会が以下のことを一般に理解していたと述べる。

つまりキリスト教に入ることは、日本の国家の利益に反し、また西洋の宗教を信ずるがゆえに西洋人の駆使に甘んじ、主体性を持たぬものであるかのように考えられ、白い眼でみられるかもしれないが、けっしてそのようなものではなく、日本国家の独立を堅持し、日本を新しくするのだという自誇自信をいだいていた⁵⁷。

しかし、内村にとって日本の教会による西洋批判は十分ではなく、他の福音を受け入れるガラテヤ信徒のむら気（ガラ3.1-5）に対するパウロの批判を、日本の教派教会へそのままぶつける。内村は言う。

主にアメリカに倣ふ今日の日本の基督教界が是である。即ち信者が或者に誑かされて十字架に釘けられシイエスキリストを仰ぎみることを止めて、己が手の業に重きを置くに至りし故に、此信仰の衰退が臨んだのである⁵⁸。

内村にとってガラテヤ書簡は、本来のエクレシアという神的幻を確立しようとする試みに抵抗する圧力に対するパウロの努力を描き出しているが、これは内村に西洋的キリスト教とそれに倣う日本の教会に対して厳しい批判を向けることへの正統性を与えるのである。キリスト教から西洋的要素を排除するだけでなく、内村はキリスト教を理解するうえでの新たな側面を補足しようとする。すなわち、キリスト教信仰を土着化しようとしたのである。この目的のために、内村は独特な論理を展開する。「Bushido and Christianity」という論文において、内村はキリスト教と武士道を直接結びつける。

56 内村「加拉太書の研究」、『全集』29巻所収、28-29頁。

57 海老沢・大内『日本キリスト教史』172頁。

58 内村「加拉太書の研究」、『全集』29巻所収、49頁。

Bushido is the finest product of Japan. But Bushido by itself cannot save Japan. Christianity grafted upon Bushido will be the finest product of the world. It will save, not only Japan, but the whole world. Now that Christianity is dying in Europe, America by its materialism cannot revive it. God is calling upon Japan to contribute its best to His service. There was meaning in the history of Japan. For twenty centuries God has been perfecting Bushido with this very moment in view. Christianity grafted upon Bushido will yet save the world.⁵⁹

土着伝統に対して客観的な評価を下すことは困難な作業である。とくに愛国心に関しては批判的な視点から再定義し、同時にキリスト教をその伝統の内に根づかせようと試みるとするならば。たとえば、武士道の起源と定義に関しては盛んに議論されるところだが、内村の同期であった新渡戸稲造の「*Bushido, the Soul of Japan*」によって特有のイメージが一般化された。内村と新渡戸はともに武士階級の子弟であり、初期における英語教育のゆえに漢語教育に欠けていた。それゆえ両者ともにその著作においては、過去の指導者階級を理想化する傾向がある⁶⁰。当時の植民地主義的拡大政策から内村は距離をおいていたが、これを支持する国家主義的思想も、理想化された武士道を有用と考えた。この点において、内村はそのアイデンティティ形成において文化的また歴史的な制限の内に置かれていた。彼は武士道の道徳的支柱となっている儒教を無批判に受け入れていた。したがって内村は、「其根本の精神に於て基督教は儒教と異なる事なき⁶¹」と述べている。内村は儒教とキリスト教の教えの深い関連性ゆえに、上述のとおり、日本人は西洋人よりも基督を理解し仕えるのに適してい

59 内村「*Bushido and Christianity*」、『聖書之研究』186巻（1916年1月）、『全集』22巻所収、161-62頁。

60 Inazo Nitobe, *Bushido, The Soul of Japan: An Exposition of Japanese Thought* (Shokwabo, 1901); Cyril H. Powles, 'Bushido: Its Admirers and Critics', in John F. Howes (ed.), *Nitobe Inazo: Japan's Bridge across the Pacific* (Oxford: Westview Press, 1995), p. 115; 太田『内村鑑三』、23頁; Masao Maruyama, *Thought and Behaviour in Modern Japanese Politics* (Oxford: Oxford University Press, 1963), p. xii.

61 内村「イザヤ書の研究」、『全集』31巻所収、25頁。イザヤ書1章2-9節に言及。

ると述べている。ちなみに儒教的価値観によって制限されている内村は、社会における女性の役割に関して保守的な姿勢を示している。彼の女性に関する保守的な姿勢はガラテヤ書の解釈のみならず、イザヤ書やエレミヤ書の解釈においても見られる。ガラテヤ書簡のバプテスマ制定句——「もやは、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません」(3.28)——を評する内村は、このテキストから性急に平等主義を読みとろうとする西洋人の傾向を唐突に非難し、「異常」という烙印を押す⁶²。そして早々とエフェソ書簡5.22-24の家庭訓へと読者の注意を向け、これが儒教的思想と類似している点を強調する⁶³。

それにしても、キリスト教が武士道に根ざすというイメージは、不明瞭なアイデンティティに不安を抱く読者に自信を抱かせるという目的を達成している。日本のキリスト教の世界における役割に関するこの自信は内村が再定義した愛国心を反映している。すなわち、愛国者とは祖国のために理想的幻を抱くのである。この土着化の過程において、パウロ自身は「侍の中の侍」にされる。日本文化とヘブライ文化のあいだに類似点を見出した内村は、歴史的にはそのあいだに横たわる西洋文化を飛び越えて、以下のように評する。

Paul, a Jew and a disciple of Jesus the Christ, was a true samurai, the very embodiment of the spirit of Bushido. Said he; "It were good for me rather to die, than that any man should made my glorying void." 1 Cor. IX, 15. He preferred death to dishonor, to dependency, to begging for whatever cause. ...then, none was more loyal to his master than Paul was to his.... Independent, money-hating, loyal, — Paul was a type of the old samurai, not to be found among modern Christians, both in America and Europe, and alas also in samurai's Japan. ⁶⁴

62 内村「エレミヤ伝研究」、『全集』29巻所収、381頁。エレミヤ書3章に言及。

63 内村「加拉太書の研究」、『全集』29巻所収、55-58頁。

64 内村「Paul, a Samurai」、『聖書之研究』239巻(1920年6月)、『全集』25巻所収、362-63頁。

ここでは、死をも美化する武士道の恥と誉れという枠組みの内にパウロが引き込まれている。したがって、他所ではパウロの政府に対する従順に関する教え（ロマ13.1-7）に対して躊躇を示しながらも⁶⁵、この箇所においてはパウロをして国家権力に抵抗する殉教が誉れであると言わしめる。この過程を通して、以前は西洋文明の魂であった書物が、日本的キリスト教の聖典と化すのである。侍の心を持つパウロは、これまで以上に日本人キリスト者の心に強く語りかけるのであり、内村が「日本人と基督教」という論文で述べるように、日本人キリスト者は西洋人以上に聖書を理解し従うことができるのである⁶⁶。

結論

内村による聖書受容の様子を、明治日本の成立、キリスト教共同体の発生、そしてとくに無教会の発生という社会的・歴史的な文脈の中で概観した。内村を取り巻く社会への批評は、ときとして病的なほどに手厳しく、ときとして驚くほどに理想主義的である。そしてこれらの批評は、キリスト教と再遭遇した社会において出現した不確実なアイデンティティに存在意義と正統性を提供するためのレトリックである。内村は彼自身と彼の無教会の存在意義を追求しようと聖書に向かった。この追求において内村は、預言者への神的召命ゆえに居心地の悪さを体験せざるを得なかったイザヤやエレミヤ、そしてとくにガラテヤ書簡にその体験が反映されているパウロに対して、強い共感を示した。

反動的なレトリックと理解しながらも、内村の西洋に対する批判は著しく厳しく、そのような批判的態度が暴力的結果を生じさせはしまいかとの危惧を生みかねない。したがって本論文を閉じるにあたり、1つの視点を提供して閉じることとする。キリスト教との遭遇が引き起こした内村の厳しい批判をとおして、民族や社会の境界線を越えてあまねく人々に善意をもって関わろうと努める宣教的試みにさえも、暴力や脅威が感じ取られる可能性は否定できない。したがっ

65 内村「ロマ書研究」、『全集』26巻所収、406頁。

66 内村「日本人と基督教」、『聖書之研究』301巻（1925年8月）、『全集』29巻所収、277頁。

て、今日的なキリスト教の善意活動に関する熟考と、福音宣教の結果に関する注意深い聖書解釈が求められる。

内村と同時代の教派教会も同様の周縁化を体験しており、内村がキリスト教と遭遇した際の葛藤に対してある程度の共感を示すことはできた。しかし「教会ではない教会」という到達不可能な理想のために、一般には内村に対して距離をおいた⁶⁷。この特徴的な理想のために、無教会は教派教会から距離をおき、また社会一般からも距離をとった。現在においても無教会は、預言者としての特別な役割を担っている⁶⁸。日本のキリスト者にとって重要なしかし居心地が良いとは言えない、初期のアイデンティティ確立のための葛藤がいかなるものであったかを忘れさせない預言者の声を発している。この時代にあって日本のキリスト者は、内村が「イエスの焼き印」と呼ぶ迫害と周縁化をその身に、日本のキリストの体に、刻み込まれたのである。

米国と日本の軍事主義に対して厳しい批判を向けた内村が、両国の軍事的衝突に対していかに反応したことが興味深いところである。内村は第二次世界大戦を前に没したが、彼の弟子たちの生き様にその精神は受け継がれた。これに関しては、挙国一致政府の思想統制に対する抵抗を象徴する矢内原事件に言及すれば十分であろう。この際に矢内原忠雄は東京帝大を1937年に追われ、反戦思想が明確な彼の著書は刊行廃止となった。矢内原はその著『国家の理想』の中で内村の理想的愛国心を継承し、強者が弱者の人権を侵害することのないよう保護するという基本的正義を国家が怠るとき市民から批判の声が上がるべきである、と述べている⁶⁹。同年に南京において弱者の人権が著しく蹂躪された。この当時、教派教会が以前掲げた基督公会という理想が最も醜い姿で実現した。

67 海老沢・大内『日本キリスト教史』372-77頁。

68 この体験をヴィクター・ターナーの「恒久的境界性」と対比できよう。Victor Turner, *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure* (New York: Aldine de Gruyter, 1969) を参照。

69 発禁になった矢内原の著書は『民族と平和』である。この著と「国家の理想」という論文は以下に所収。家永三郎他編『日本平和論体系』10巻、日本図書センター、1993年。大河原礼三著『矢内原事件50年』木鐸社、1987年。

すなわち教会は帝国政府の圧力の下、その拡大主義を支持し、その支配下に身を置くこととなった⁷⁰。

したがって日本のキリスト教史は、現代の教会に対して少なくとも2つの呼び声を響かせている。その1つは、内村が「イエスの焼き印」と連想させた体験、すなわち新たな宗教とその聖典を受容したために起こった迫害と周縁化の体験である。もう1つは、身に与えられた「棘」(2コリ12.7)とでも連想できよう体験、すなわち不可避的であれアジアの隣人を周縁化する力の一部となった体験である。明らかに刻まれたイエスの焼き印と深く刺さった棘———被迫害者としての共感と迫害者としての悔悛———を身に負い、日本の教会は実りのある聖書受容を続けなければならない。自らのためにも、また可能であれば内村が理想としたように、世界のためにも。

70 この国家圧力に個人的に抵抗した聖職者や信徒は当然いた。家永『日本平和論体系』14巻、1994年参照。